

部半島を攻略したる後伊江島を攻撃するや或は兩方面固持に攻撃し來たるや等の場合を考慮しありしが敵は其の優越せし戦力を持み一舉に大航空根據地たる伊江島に上陸する算大なりと判断せり依つて本部半島の支隊主力陣地内には獨立重砲第百大隊の一小隊（十五加二）及海軍十加二ヶ配置し之に依り敵の伊江島上陸竝に爾後に於ける同飛行場の使用を妨害する計畫なりしも敵が慎重に先づ本部半島に上陸せし爲是等長射程砲は其の威力を發揮するにかりき然れども軍としては國頭支隊の戦略的配置に依り敵の伊江島攻略を遅延せしめたるを以て同支隊の主任務たる一勉めて永く敵をして伊江島飛行場を使用せしめざるの目的を達せりと觀察し得べし

其の二 遊撃戰轉移後の狀況（自四月二日）

石川岳に後退國頭支隊長の指揮下に入れる特設第一聯隊（實正聯隊は通信連絡其の他の關係上國頭支隊長の掌握下に入りあらず）は第四遊撃隊と相協合し石川岳恩納岳の間を往來して遊撃戰を續行し終

戦に至るその間聯隊長青柳中佐七日戦死す四月二十四日夜タニ岳を徹し國頭北部地區に分散退せる國頭支隊主力は爾後概ね統制なく行動し遊撃戰の效果見るべきものなし第四遊撃隊は四月六日石川岳より恩納岳に後退四月十二日より五月一日の間敵の攻撃受けたるも克く之を保持して遊撃戰を續行しありしが五月二十一日より再び敵の攻撃を受け六月六日久志岳に後退す爾後依然と規模し遊撃戰を續行して終戦に至る第三遊撃隊は敵撤退後再びタニ岳に據り其の周邊地區に對し小規模の遊撃戰を稍々活發に續行し敵宿營地の來襲交通妨害に任ず相當の效果を収めたり逐次島尻方面に南下して主力の地區の掃蕩概成するや四月下旬より逐次島尻方面に南下して主力の戦團に参加し爾後は我が殘存部隊に對し單に警戒的措置を執るに止めたるものゝ如し

○、慶良間方面の戦闘

慶良間郡島に展開せし海上挺進第一及第三戦隊は第十一船舶團長大町大佐の同方面巡視中三月二十六日米艦隊攻撃するところとなれり

郡在座間休島第一戰隊在阿嘉島第二戰隊は三月二十六日在渡嘉敷島  
第三戰隊は翌二十七日夫々有力なる敵海兵部隊の爲に慶良間灣岸よ  
り上陸攻撃せらるる諸隊は之を海上に激撃するの違なき又船舶團長の  
全戰隊を率ひて沖繩本島に轉進するとの企圖（獨斷）も空しく水泡  
と歸し各戰隊は夫々山上に壓迫せられ適量して終戦に及ぶ止むを得  
ざるに至れり軍司令部と右諸部隊との通信連絡は三月二十七日以後  
杜絶し爾後查として状況明かならず玉碎と推定せられありしが五月  
上旬一部人員の本島脱出に依り状況判明せり稻垣小尉に通信機關を  
附して渡嘉敷島に派遣するに及び連絡回復し同方面の状況は概ね軍  
司令部の承知するところとなれり

#### D、海上 戦 闘

##### 其の一 海上挺身隊の運用

軍は海上挺身隊第一乃第三戰隊は慶良間群島に海上挺身隊第二十六乃  
至第二十九戰隊を沖繩本島に主陣地帯内部に配置し敵上陸の初動隨  
時隨處に其の主力を機動集中して敵輸送船團を攻撃一舉に決勝的效

原中少将

陸 軍

果を求むるを一般の方針とせるは作戦準備の項に記述せし通りなり  
決勝的用法は以上方針の如くなりしも**捷流**な作戦より天賜作戦への轉移  
即ち軍の任務が決戦より持久に變更せられ航空部隊の作戦方針も亦  
持久消耗の性格顯著となるに及び作戦勃發直前に於ては軍首脳部の  
意向は漸次持久消耗主義に傾けり偶々作戦勢頭在慶良間の三ヶ戰隊  
を失ふに及び決勝的用法は完全に断念せざるを得ざるに至れり茲に  
於て軍司令官は持久用法に決し小規模の出撃を持続的に實行して敵  
海上艦艇の行動を制し陸上作戦を容易ならしむることとせり

##### 其の二 海上挺身隊攻撃の状況

軍は新方針に基き一部海上挺身隊第二十七戰隊（一中隊欠）を以て中  
城灣方面爾餘の在本島兵力を以て西海面特に嘉手納沖方面の敵艦艇  
を夫々好機を捉へて攻撃をせしめたり攻撃は四月上旬より開始せら  
れ五月三日攻勢に於ける逆上陸策應を以て最高潮に達し五月下旬首  
里戦線後退の頃迄繼續せり作戦開始直前保有せし出動可能舟艇數約  
二百八十隻（第二十九戰隊は一中隊のみ戦場到着主力は乗船沈没の

爲奄美大島に帶留) 出撃命中せりと推定せらるゝもの百二十四隻判定せる撃沈敵艦艇數輕巡以下十數隻なり

各戰隊別推定出撃命中數左の如し

第二十六戰隊 一六

第二十七戰隊 六八 (内二八は西海面に出動)

第二十八戰隊 二四

第二十九戰隊 一六

出動可能數と出撃命中數と差は待機間に於ける砲爆の被害出撃途中に於ける損害竝に狀況不明に基き固するものなり  
攻撃精神旺盛なる各戰隊は攻撃用舟艇を使用盡したる後に於ても所在列舟を利用之に爆雷を搭載して攻撃を續行せり判定撃沈數は其の攻撃が暗夜必死的に實行せられ確認の方法頗る困難なりし爲必しも正確を保し難し元來挺身攻撃の成果に就ては其の方法頗る原始的なる爲軍首腦部は勿論實行擔任者と雖多大の疑惑を有しありしところにして事實物的戰果は中央部の努力と熱意に副はざるものありき

陸軍

其の三 其の他の方法を以て敵海上艦艇に對する攻撃

一 海軍根據地隊は左の如く敵艦艇を攻撃せり

イ 運天港根據地とする小型潜水艦魚雷攻撃に任ずる快速艇隊

敵の上陸前既に根據地に於て砲爆に依り大損害を受け以て四月

上旬之に占領せられ活動不能となれるもの豆潜水艦は慶良間方

面まで進出して敵を攻撃せり

ロ 海軍砲台は當初軍の作戰方針に基き沈黙主義を採れるも作戰後

半に於ては好目標を捉へて之を攻撃し相當の成果を収めたり

ハ 本島周邊の敷設せし機械水雷は敵に相當の損害を與へたり

ニ 海岸に施設せし魚雷發射機關(中城灣岸與郡原に於けるもの)如

きは攻撃實施するに至らざりき

三 陸軍部隊の一部も作戰未明特に海岸に近接する敵十舟艇を攻撃せ

しことありしも戰果見るべきもなし

五、沖繩周邊に於ける我が航空部隊の活動  
 其の一 軍より觀たる航空作戦の要領

天號作戦計畫に基く「張り付け總特攻」主義は作戦準備の頃に記述せる如く南西諸島に關する限り展回機を失し「張り付け」の企圖は畫餅に歸せり他面「總特攻」主義は忠實に實行せられたるも其の兵力の運用集中<sup>大</sup>勝的ならず持久消耗主義に終始せり  
 航空作戦上の我が戰略的優位を恃み敵上陸軍を海上に於て一舉に撃滅せんとする航空部隊の理想は一場の變と化し其の本格的活動は四月四日敵上陸後開始せられ爾後連日十數機乃至數十機を以て本島周邊に蝟集する敵戰艦艦艇（輸送船にあらず）に對し必死突撃を繼續せり作戦の終始を通じ無事沖繩近海に到達突撃せし機數一千五百機を下らず海上特攻主義の徹底せる遂に一機も地上戦闘に直接參加するものなかりき

其の二 航空作戦の地上戦闘に及したる影響

純作戦的見地より判斷し我が航空部隊の作戦は地上作戦には大なる

陸軍

影響な<sup>大</sup>敵の陸海空三軍は殆意の如く沖繩攻略戦を遂行せり我が航空部隊は海上戦果（第六の海上攻撃を含む）は一應左の如く統計上に表し居るも戦果確認方法頗る不確實にして實際の戦果は遙<sup>大</sup>多<sup>大</sup>く沖繩周邊に行動する敵艦艇の數は我が空襲に依り殆増減せざりき

大破炎上	A-11	計	389
	a A-13~14		390
	B-6		
	C-29		
	D-100		
	E-82		
	不-114		
	他-35		
計			619
中小破	A-6~7		
	a A-8		
	B-14		
	C-34		
	D-19		
	E-34		
	不-116		
	他-2		
計			230
			231
計			621

純作戦上の一般觀察以上の如くと雖必死特攻に任じたる幾多忠勇無比なる戦友の拿き犠牲的行爲に依り地上作戦軍の物心兩面上得たる支援は斷じて過少評價すべからず其の主要なるものを擧ぐれば左記の如し

全軍環視の裡幾万千の火光に染まる防空彈幕に悠々突入する特

攻機の壯烈鬼神を泣かしむる光景は將兵の志氣を鼓舞し見我等は孤ならずとの自信力を維持するに絶大の効果ありたり

2 特攻機の攻撃待機は黎明薄暮及自明の空に選定せられたり従つて敵艦艇は晝間に於ける行動は自由なりしも日没前頃より翌日出直後頃迄の間は我が特攻に因り損害を極減せしが爲其の主力（有力なる一部は夜間と雖沿岸に殘留し不斷の猛砲撃を繼續せり）は距岸三四十杆の沖合に避退（通常粟國島附近慶良間灣内及其の西方海面添川沖）し防壁陣を形成するを常とせり之が爲薄暮より黎明に至る間は我が地上部隊の兵力機動、部署の變更整理築城の増強補備軍需品の補給輸送等を可能容易ならしめ大いに地上作戦に貢獻せり

#### 其三 地上作戦の航空作戦に及したる影響

1 沖繩本島及伊江島の各飛行場を勉めて永く敵に使用せしめざるに就ては中央部及航空部隊の要求強烈にして作戦の綜合的效果を無視し遂に之を破綻せしむるの要因を爲せり關係各方面の如何な

る論難あるにせよ軍は独自の主義方針を以て遂に四月中は敵をして前記各飛行場を有効に使用し得ざらしめたり敵が主として艦載機に依り戦闘するの止むを得ざりし此の間十日間は我が航空部隊活動の爲決して短少の期間にあらず若し之をしき希望に合せずとせば寧ろ航空作戦の計畫指導に不備ありと謂ふべきなり

2 軍は戰略持久目的の一として勉めて長期に亘り敵艦船を沖繩近海に抑留し以て我が航空部隊の消耗作戦を容易ならしめんとせり本件に關しても軍は概ね其の目的を達したりと觀察し得べく又航空部隊は其の有する限り實力を行使するに遺憾なかりしなからん

#### 第四 組織的戦闘終結後より終戦に至る状況

##### 其の一 終戦頃迄の状況

軍主力方面六月二十三日黎明軍司令官は自決と相前後し第六十二師團獨立混成第四十四旅團軍砲兵隊の各司令部は摩文仁附近に於て又第二十四師團司令部は六月二十八日眞榮平に於て夫々玉碎す

其の他の第一線諸部隊も亦軍の最後の命令に基き各高地に於て孤立戦闘を続け六月末迄には部隊として概ね玉碎し終れり。爾後有力なる指揮官を失へる將兵中敵線を突破し國頭郡方面に脱出遊撃戦を繼續せんとする者數千を下らず其殆全部は目的を達せずして戦死し爾他の殘存將兵は各洞窟陣地内に於て遊撃戦を續行して終戦に至る其の數も亦數千なり此の種の將兵中最異色あるは歩兵第三十二聯隊（配屬部隊の一部を含む）が聯隊長大隊長以下數百名第二十四師團の主陣地帶上國吉附近の洞窟陣地に於て遊撃戦を繼續して終戦に至る。

#### 軍主力以外の方面

慶良間群島及國頭群方面の部隊は死傷比較的尠く其の大部は戦闘經過概要に述べたる如く或るものは敵の攻撃を受るとなく又或るものは分散して地下密林或は島民の間に潜伏して緩徐なる遊撃戦を續けて終の戦に及べり。

#### 其の二 終戦後の状況

生存將兵は終戦後逐次武装解除せられ昭和二十年九月上旬頃迄には其の大部は陣地を出でて在自川收容所に入爾後少數宛殆ど日降任者續出年末に及べり生存者の概數左の如し

將校	約五百
下士官	約一千五百
兵	約七千
總計 約九千	

一、沖繩出身者 將校以下 約八千

沖繩のみならず布哇其の他各地の收容所に入所したるものゝ推定數なり

右數字の外防衛召集者にして終戦前後に亘り非戦闘員を裝ひ一般住民に混入せるもの略々右に匹敵すと判定せらる

海軍關係 一千内外と判断せらる

二、彼我損害の概況